部屋の壁の穴の向こうの

屋下雨宿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
部屋の壁の穴の向こうの

【Ｎコード】
Ｎ０４６８ＢＡ

【作者名】
屋下雨宿

【あらすじ】
年内に間に合わせようとして間に合わなかったガッカリクオリティ。

何処にでもあるような１ＤＫのこぢんまりとしたアパート。その一階にある一〇三号室。そこに僕は暮らしていた。大学生になってはじめた始めての独り暮らし。それも、そろそろ一年が過ぎる頃になるのか。

「ふぅ、大掃除終わりっと」

今は年の瀬。部屋の片付けを終えた僕は、窓を閉めると一息ついた。

振り返ってみた八畳間は、男の一人暮らしなど微塵にも感じさせないような綺麗に片付けられた部屋。我ながら惚れ惚れする仕事っぷりだ。

ポケットから取り出した携帯を開く。

十二月二十八日。午前十一時。「よし。丁度いい時間だ」と部屋の隅に置かれていた旅行バックを手に取り、新幹線のチケットを確認する。

僕はこれから実家に帰省する。みんなそうするし、至って当たり前の事。それでも、正直言って気分は重たかった。

別に親が嫌いだとかいう訳ではない。家は遠く、長旅が嫌だという訳でもない。何が気分を重たくしているのかと言うと、彼女が何故か実家までついて来ると言いだした事だ。

付き合い始めてまだ2カ月ちょっとの彼女。親に紹介するとか、まだまだそんな事は考えてもなかった。むしろ、その逆。価値観の違いから別れようかと考えているぐらいの彼女だ。

同じ大学で知り合った彼女。名前は桃百萌（もしも）。周りからはももと呼ばれている。

間違いなくオンリーワンで誰も読めない名前であり、本人もそれを鼻にかけて自慢するちょっと変わった子である。でもまぁ、名前なんて本人の責任ではない訳だし気にはしない。彼女にはもっと大きな問題がある。時空間を捻じ切っても、どうしようもないような問題が――

溜め息を付きながら靴を履くと、扉に手を掛けようとした。その時だった。

「きゃあああっ！」

背後から爆音と悲鳴。そして衝撃。この建物が横転してしまうかと思うほどの強さで、僕は反射的に身を屈めた。

衝撃が収まってから顔を上げて振り返る。

一瞬、目を疑った。それは八畳間の壁が吹っ飛んでいたからだ。何かの例えとかではなく、そのまんまの意味で。壁には大きな穴が空き、掃除したばかりの綺麗な部屋には破片が飛び散り砂埃が舞い上がる。

言葉も出なかった。だが、身体は自然と動いていた。靴を脱ぎ捨てて壁が吹き飛んで出来た穴に近付くと、恐る恐るその中を覗き込む。

「いたた……」

真っ先に目に付いたものは真っ黒の塊。いや、黒いマントととんがり帽子の彼女が蹲っていた。

「だ、大丈夫ッ！？」

僕はその穴を潜りぬけると、彼女に駆け寄り抱き起した。

「う～ん……」

顔を仮面で隠しているのでよくわからないが、その声や身体つきから彼女であることは間違いない。

「す、すみません。魔法の研究に失敗してしまったみたいで……」

身体の方は大丈夫そうだが、どうやら頭を打ったようだ。また可笑しなことを口走っている。

「どうやら、また異世界と繋がってしまったみたいですね」

僕の服装をまじまじと観察し、手触りを確認してから、彼女はそう告げる。

「はぁ、異世界ねぇ」

「そうです、異世界です。タツガルドへようこそ！」

彼女は立ち上がると、「この部屋をみよ！」と言わんばかりに両手を広げる。

彼女が誇示して見せた部屋は、何処となくファンタジーっぽい感じ。
広さは八畳ぐらいか。真っ黒のカーテンに四方を覆われており、部屋の中央には怪しげな言語が所狭しと刻みこまれた魔法陣。その上には大人一人すっぽりと入ってしまいそうな位の大きな壺。そんな部屋を映し出してる蝋燭が小さく揺れていた。

部屋にあるもの全てが日常生活では見慣れないものばかり、本当に違う世界のようだった。

「そちらの世界は何て言うのですか？」

やたらとノリノリな様子で穴から俺の部屋を覗いている。そんな彼女の様子は手慣れてるというか何と言うか。

「えーと。地球。それとも日本？」
「ニホン……ですか。また聞いた事のない名前ですね。新世界発見です！」

彼女は豪快に壁を吹っ飛ばしたばかりだというのに、本当に楽しそうに両手を合わせてみせる。

「異世界って言ってたけどさ、そんな簡単に繋がるものなの？」
「ええ、簡単ですよ。私の場合は特に！良く！頻繁に！」
「そうなんだ。すごいね」
「ええ！芸術は爆発から生まれるのですよ！すごいのですよ！」

もうそろそろいいのだろうか？僕は急いでいるのに。

「……で、何で日本語話せるの？」
「え？神様がなんとかしてくれるような……ご都合主義？」
「ふ～ん……。それでも、そっちの世界の言葉もあるんでしょ？一度、聞いてみたいなぁ」
「え？うーん、そうですねぇ。え～と……。ア、アイム　スピーク　イングリッシュ」

それは小学生にも笑われてもおかしくないレベル。

「なんて、たどたどしい英語なんだ……」
「う、ならば！ワタシハ　ウチュウジン」

喉元に手を当てながら無理やり声をつくる。しかも、まんま日本語だろう……。

「宇宙人って、異世界じゃなかったのか？」
「これが私の国の言葉なんですよ！信じてください！」

腰のあたりに飛びつくと。頭を擦りつけてくる。正直言ってウザったい。
まぁ、言ってる事はそうなんだけど。

「だぁぁ！縋りつくな！！僕はもう帰る時間だよ！」
「そんな殺生なー。折角、異世界に来たんだからゆっくりして行ってくださいよー」

今度は袖を摘まみ、クイクイと切なそうに引っ張ってみせる。それでも、新幹線のチケットだって買っている訳だし、これ以上構っている時間はない。

「そんな事言うなら、片付ける！」

部屋全体を覆っている真っ黒のカーテンに手を掛ける。

「ああ！それは駄目です！」

「駄目じゃない！」

「この先には人には見せられない乙女のひみ……って、あーッ！」

力いっぱいカーテンを引き剥がす。

その先は窓。俺の部屋と同じ大きさで、同じもの。

そして、外の景色。目の前は道路でその先には小さな川が流れている。これも、俺の部屋からでも見れる景色である。

その次に、慌てて駆け寄って来た彼女の仮面を奪い取る。

「あ……」

彼女と見つめ合う。

「しまった。バレてしまったか」

「最初からバレてるから。全く、またこんな事をして……」

「今日はいつも以上に短気で冷たいですねぇ」

「短気も冷たいもあるか！人の家の壁までぶっ壊しておいて！」

「それぐらい簡単に直せますよ」

あっけらかんと軽く行ってのける。実際、本当に直してしまうのだから、これ以上は文句も言えない。

「それじゃあ、帰るからな！それ、ちゃんと直しとけよ！」

「ええー。いいじゃないですかー。もうちょっと遊びましょうよー」
彼女は服を掴んだまま離そうとしない。軽く振りほどこうとしてもダメ。
「今日から実家に帰るって前から言っておいただろ？」
「え？それは明日でしょ？」
「今日だよ。今日。それも今すぐ出ないと電車に間に合わないから」
携帯を取り出して日付と時間を見せ付ける。
「あれ？あれれ？」
彼女は眼をパチパチさせながら、携帯を眺めている。それから、目をゴシゴシと擦ってもう一度。腕を組み、頭を抱えた後、手を叩くとカーテンの裏に潜り込んでいく。
「あーっ！またセッティングに丸二日も使ってるー！」
絶叫。お気に入りのデジタル置時計でも見てるのだろう。
叫び声の後にボフボフと空気の抜ける音。これはお気に入りのクッションに頭を叩きつけてるのだろう。
「それじゃあ、僕はもう行くから。また来年。よいお年を」
「待って！後十分！いや五分だけでも！後生ですから、おねげぇしますだ！」
カーテンの向こうからミサイルのように飛び付いて来る。悪気はないのだろうが、鳩尾にダイレクトなヘッドバット。非常に痛い。

「ぐふっ……。分かったから！くっ付いてないで、はやく支度しろよ！」

マントと帽子を脱ぎ捨てたところで彼女の動きが止まる。

「……あ」

「何？」

「着替えを覗くなー！」

顔面に右ストレートの後、部屋から叩きだされてしまった。

「……全く、人前で堂々と脱ぎ始めたのはどっちだよ」

壁の穴から追い出された僕は、腰を擦りながら立ち上がり振り返る。壁の穴の向こうには、真っ黒のカーテンが下ろされていた。

「なぁ、本当について来るのか？」

カーテンに向かって話しかける。

「婚約者として当然でしょ？」

「婚約者って、いつからそんな話になったっけ？」

「出会った瞬間からに決まってるでしょ！惚けないで！」

全く、惚けてるのはどっちだよ。

何処までが演技で、何処からが本気なのか？彼女の考えている事

がホントにわからない。

『付き合ってる事も全部コスプレのようなもの』

そうだと言ってくれれば、まだ少しは楽になるのに。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0468ba/

部屋の壁の穴の向こうの

2011年12月31日23時47分発行